

**[新刊紹介] 日本カヤツリグサ科植物図譜, シデコ
ブシ, 伊豆七島フィールドノート 神津島花図鑑,
Plant Dictionary 植物名の英語辞典,**

著者	五百川 裕, 中田 政司
著者別表示	Iokawa Yu, Nakata Masashi
雑誌名	植物地理・分類研究
巻	59
号	1
ページ	58-60
発行年	2011-12-01
URL	http://doi.org/10.24517/00053458

新刊紹介

○星野卓二・正木智美（著）・西本眞理子（画）：日本カヤツリグサ科植物図譜 B5 版，778 頁，2011 年 3 月 15 日，平凡社，20,000 円（税別）。

日本全域（南西諸島や小笠原諸島を含む）に生育するカヤツリグサ科植物を網羅した線画による図鑑である。イネ科とカヤツリグサ科は一目では特徴を捉え難い細長い葉と花序を持ち，種類の判別の難しい科の代表とも言える。イネ科については，1989 年に出版された長田武正著「日本イネ科植物図譜」（平凡社）が線画により各種の特徴を詳しく記載し，大抵の種類の判別は容易になったが，これまでカヤツリグサ科については，そのような図鑑がなかった。スゲ属については，過去に図譜も出版されており，日本産全種を写真により詳説した勝山輝男著「日本のスゲ」（文一総合出版）もあったが，日本産カヤツリグサ科全体をまとめた図鑑は本書が初めてであり待望の出版と言える。

本書の構成は，同定に必要な科の形態解説，属の検索表，種の検索表，種の解説からなり，種の解説は，見開き左頁に形態，花期，分布，類似種との識別点などが日本語と英語で記載されており，右頁に全体，小穂，鱗片，果苞，瘦果の線画が掲載されている。線画は特徴を捉えた美しい描写で，見ていると生時の様子，色合いまでが浮かんでくるようである。本書のフォーマットは上記の「日本イネ科植物図譜」にならっており，表紙も色違いで装丁され，姉妹書となることを意識しているようで，書棚に並べるときれいにおさまる。

日本のカヤツリグサ科植物は 26 属約 500 分類群あるとされ，本書では今まで記載されたなるべく多くの分類群を掲載したが，現段階で分類学的な検討が十分でなかったものは除いたと「はじめに」で書かれている。掲載した分類群数は記載されておらず，これをランク毎に記載してあるとありがたかったが，スゲ属について数えてみると 311 分類群が検索表に扱われており，上記の「日本のスゲ」は 289 分類群（解説文中にのみ記載されているものがあるので，実際はこれよりも多い）を扱っているもので，より多くの分類群について解説されていることになるだろう。「はじめに」では，同じ分類群でも研究者の見解により別種としたり，同一種として記載されるなど統一がとれていない現状が述べられているが，英文の記載がついて日本のカヤツリグサ科植物の現状での分類学的取り扱いの全体が出版された意義は大きい。マダラスゲなど未記載種も *Carex* sp. として英文記載付きで掲載されており，今後の研究の進展が望まれる。

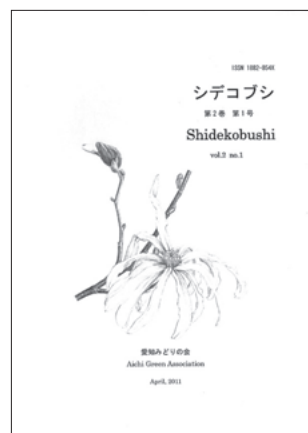
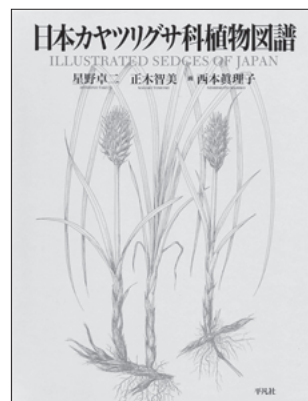
著者の星野氏は，「すげの会」の会長として，正木氏は幹事として活動を支えておられるが，「すげの会」の会員の協力がなければ本書の完成はなかったと謝辞を述べられている。「すげの会」では，日本産スゲ属植物分布図集の作成も進めており，近い将来の出版が期待される場所である。本書では線画のみであるが，「すげの会」ホームページには，「カヤツリグサ科植物図鑑」と題して 381 種の写真を公開しているので，合わせて利用されてはいかがだろうか。<http://hos0.big.ous.ac.jp/~hoshino/Labo/colorzukan/hyousi.htm>

（五百川 裕）

○芹沢俊介・渡邊幹男（編）：シデコブシ。B5 判，2011 年 4 月 10 日（第 2 巻第 1 号）。愛知みどりの会。

2008 年 4 月 30 日に創刊された雑誌なので新刊というには日が経ってしまったが，新しい雑誌なので最新号の発行を機に紹介したい。

発行は，生物多様性や環境教育に関するいくつかの組織の連合体である「愛知みどりの会」で，投稿規定には「日本の維管束植物フロアの解明とその保全（保全の基礎となる種生態学的研究を含む）に寄与することを目的とした雑誌」とあり，一般の投稿を受け付けている（将来は会組織とした会員誌の予定）。表紙，裏表紙には，雑誌名となったシデコブシの植物画が鳥居ちえ子氏によって描かれている。誌名は，愛知県を代表する植物であり，「わかっているようで実は意外に解明されていない部分がある日本のフロア」の象徴として付けられたものである。現在の日本の植物分類学界では少数派とされるこのような見方に立ち，さらに軽視されがちな和文論文にこだわって創刊された雑誌である。頁数の関係で雑誌タイトルの紹介欄を次号に回したことから，シデコブシのこれまでの掲載論文をここで紹介する。



1 巻 1 号 (2008 年 4 月) —花井隆晃・芹沢俊介: 日本のミズソバ類 (3-26) /金子法雄・芹沢俊介: キンミズビキの再検討 (1) 愛知県における短毛型と長毛型の関係 (27-35) /芹沢俊介: キンミズビキの再検討 (2) 分類学的考察 (37-44) /芹沢俊介: 本州中部産マムシグサ類の 1 新種 (45-50) /芹沢俊介: アキノウナギツカメズ (51-53) /芹沢俊介: 東海地方丘陵地の「モンゴリナラ」 (54-55) /芹沢俊介: どうにかしようエノコログサ (56-57) /芹沢俊介: 獅子葉のセイタカイワヒメワラビ (57-58)

1 巻 2 号 (2009 年 12 月) —渡邊幹男・芹沢俊介: ツリフネソウ属の 1 新種ワタラセツリフネソウ (61-70) /渡部清香・芹沢俊介: ポントクタデの再検討 (1) 愛知県および岐阜県における早咲き型と遅咲き型の形態的差異 (71-80) /芹沢俊介: 日本産シダ植物雑記 (5) (81-100) /芹沢俊介: アイオナモミ (101-102) /芹沢俊介: 小笠原諸島の「オニホラゴケ」 (102-104)

2 巻 1 号 (2011 年 4 月) —坂本晃伸・加藤淳太郎・芹沢俊介: ポントクタデの再検討 (2) 核 DNA 量 (1-6) /芹沢俊介: ポントクタデの再検討 (3) 早咲き型の分類 (7-10) /芹沢俊介・阿萬朱未: ノキシノブの 2 型 (11-22) /阿萬朱未・加藤淳太郎・芹沢俊介: トウゲシバ類の再検討 (1) 愛知県産個体群の核 DNA 含量 (23-32) /阿萬朱未・加藤淳太郎・芹沢俊介: 日本産イワガネソウ属の再検討 (1) イワガネゼンマイの核 DNA 含量 (33-40) /阿萬朱未・加藤淳太郎・芹沢俊介: 日本産イワガネソウ属の再検討 (2) イヌイワガネソウの核 DNA 含量 (41-46) /阿萬朱未・芹沢俊介: シケンダ類数種の核 DNA 含量 (47-48) /竹下希望・阿萬朱未・芹沢俊介: 愛知県におけるイヌコハコベの分布 (49-56)

なお、雑誌は年 1 回発行、2 年で 1 巻の予定で、予約購読料は 1 巻分で 3,000 円、バックナンバーは 1 部 1,000 円 + 送料とのこと。希望者は〒448-8542 刈谷市井ヶ谷町広沢 1 愛知教育大学自然科学系生物領域 芹沢俊介 宛に申し込まれるとよい。

(中田政司)

○七島花の会 神津島:伊豆七島フィールドノート 神津島花図鑑 A5 判変形, 407 頁. 2011 年 6 月 20 日. 日本出版ネットワーク. 2,857 円 + 税.

本書は伊豆七島神津島に自生する植物 554 種を収録, 480 種についてカラー写真で紹介したものである。「七島花の会」は、伊豆七島の自然を慈しみ、植物の調査・観察・記録を行っているグループで、会員の石橋正行氏が執筆を担当し、多くの会員が調査と写真撮影を担当してこの本が出来上がった。

本は、第 1 章 3・4 月から季節を追って第 8 章 10・11 月まで 1 ページに 1〜4 種ずつ植物が紹介され、写真は多い時には 1 ページに 10 点も使われている。花の構造や花色・花形の変異などが写真で解説されており、ショウジョウバカマやオオシマツツジ、ガクアジサイなどの花色の多様さに驚かされる。51 種 (うち 2 種絶滅) が生育しているというラン科植物の写真は特に秀逸で、島を代表するコウゾエビネをはじめトキソウやヨウラクランに見られる花の変異、コクランとシマササパランの比較、シュスラン類やトンボソウ類の近縁種の比較、ハルザキヤツシロラン、ヒメノヤガラ、ナヨテンマのような目にする機会の少ない菌根生腐生ランなど、フィールドワークの成果として見ごたえがある。タヌキノショクダイ、ホンゴウソウ、ウエマツソウ、ヒナノシャクジョウ、キリシマシャクジョウ、シロシャクジョウなどラン科以外の珍しい菌根生腐生植物の写真も貴重である。特に本誌 (59 巻 1 号)

で正式に産地報告されているタヌキノショクダイは、その複雑・巧妙な花の造りが写真で解説されている。植物地理・分類学会 2009 年度大会 (豊橋) で発表されたガクラセイタタマアジサイ (仮称) とコウゾシマセンブリ (仮称) も掲載されている。

11 章の資料編には、島の植生図、掲載種一覧とその花ごよみ、神津島の植物一覧 (2003 年以降確認・未確認種) が掲載されている。一般向けの図書であるためか、学名はついていない。巻末には花観察のための島の観光ガイドもあり、本を片手に神津島を訪れてみたくなる 1 冊である。

(中田政司)



○副島顕子：Plant Dictionary 植物名の英語辞典 B6 判変形，285 頁．2011 年 7 月 4 日．小学館．3,000 円＋税

著者はまえがきの最初で「どんな人がどんな時に英語の植物名を調べたいと思うのだろうか？」と執筆中に自問していたと述べている。仕事で植物を扱う人は学名を使うため、英語の植物名を調べる機会はあまりないと思われる。また一般の人でも、日常で英語に接する機会はそう多くないと思われるので、現実的な答えとしては翻訳家が仕事として調べる場合ということになるのだろうか。

実際、映像翻訳をしている知人から英語の植物名について聞かれたことがある。イギリスの田舎の秋の映像に落葉しかけた木が写っており、「oak」というナレーションが入っていた。よく使われている K 社の新英和大辞典で oak を引くと「カシワ、ナラ、カシなどブナ科ナラ属 (*Quercus*) の樹木の総称；英国自生のものは *Quercus robur* …」とあるが、これでは植物をよく知った人でないと訳しにくい。ここに紹介する本『Plant Dictionary』では、「日本語では常緑のオークをカシ、落葉のオークをナラと呼ぶ」というわかりやすい説明があり、植物の知識がない人でも映像から「ナラ」と訳出すれば良いことがわかる。

この本には 2480 件の英語の植物名がアルファベット順に収録されている。発音、和名（ない場合は英名のカタカナ読み）、学名、分布や分類学的記述の後に、形態の特徴や用途、文化的背景、名前の由来などが簡潔な文章で解説されている。話題は神話から聖書、物語、童話にまで及び、アップル社のコンピューターがなぜ Macintosh という名前なのかも判る。翻訳を仕事とする人にはお勧めの本だが、ふだん学名で植物に接している人にも、英語の名前にある背景がのぞき見できて、読み物として面白い。巻末には逆引きの和英索引がついているので、植物名の和英辞典としても利用できて便利である。

(中田政司)

